

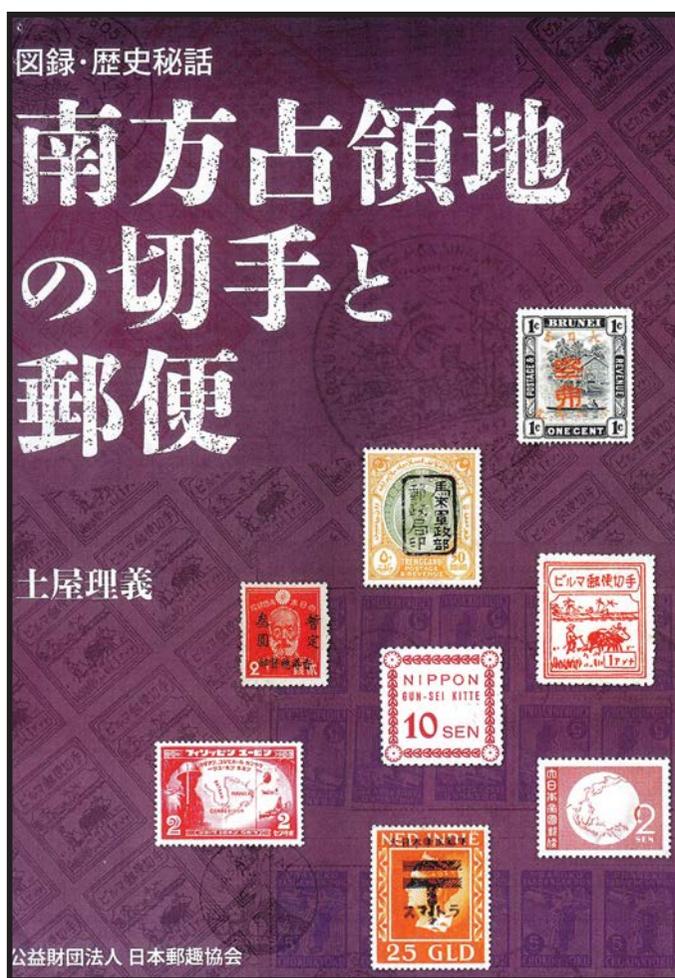
140回 稲門フィラテリー切手教室

レジュメ1

2018年3月3日

歴史秘話 南方占領地の切手と郵便

土屋 理義



泰緬鉄道の「軍事郵便所」郵便

土屋 理義

南方占領地の郵便において、存在は知られながらも長年にわたり“謎の多い郵便”とされていた「泰緬鉄道郵便」。このたび、新たな公的資料と多数のマテリアルを調査した筆者が、泰緬鉄道郵便の存在と実態を報告する。

1. 泰緬鉄道郵便とは？

太平洋戦争の最中、ビルマ戦線に展開する日本軍への補給路として、1943年10月にタイ南部のノンブラドックとビルマ南部のタンビュザヤ間415^{km}を結ぶ、泰緬鉄道が建設された。さらに同年12月には、タイ最南部のチュンボンとカオファーチーを結ぶ90^{km}のクラ地峡横断鉄道(通称クラ線)が開通した。

この沿線に現地人鉄道従事者と労務者のための郵便所が開設され、マレー人郵便局長がその任に当たった。泰緬鉄道にはタイ領内にカンチャナブリをはじめとして、キンサイヨーク、プランカシー、タマジョー、コンコイター、ニーケと、ビルマ領内のアパロンを加えた7郵便所が設置され、そのはるか南に建設されたクラ線には、チュンボン郵便所が開局している(図1地図、図8表参照)。

本稿では、この両鉄道で使用された「軍事郵便所」郵便(以下「泰緬鉄道郵便」)について、新資料に基づき、それが実在したものであることを論証する。

2. 公的資料の存在

泰緬鉄道郵便(図3, 5, 7参照)については、公的資料が存在する。南方占領地切手研究家の青木好三氏が1983年3月の「切手研究」誌上に発表した「公的資料より見た占領下馬來の郵政(3)」に、以下の重要な記述がある。これは昭南(日本占領中のシンガポールの呼称)の馬來軍政監部が極秘に作成した「戦時月報」からの抜粋で、昭和18年(1943)8月号から10月号の「郵政」の項に、泰緬鉄道郵便に関する以下の記載がある(原文は漢字とカタカナの縦書き、謄写版刷り*一図2。青木氏記載の誤りを原本通りに訂正)。

- 戦時月報(昭和18年8月)「郵政」
- 三. クラ線建設隊附「チュンボン」郵便所々員ハ八月二十九日「イボ」ヲ出發セリ
- 戦時月報(昭和18年9月)「郵政」

- 一、「クラ」線建設隊附トシテ「チュンボン」ニ郵便所ヲ開設シ九月一日ヨリ業務ヲ開始ス
- 五. 南方鉄道隊司令部ヨリ「カンチャナブリ」ニ郵便所設置アリタキ旨申出アリタルニ付南方総軍及本部ト連絡ノ上協議スルコトトセリ
- 戦時月報(昭和18年10月)「郵政」
- 三. 泰国内軍事郵便所事務開始「カンチャナブリ」「キンサイヨーク」及「コンコイター」

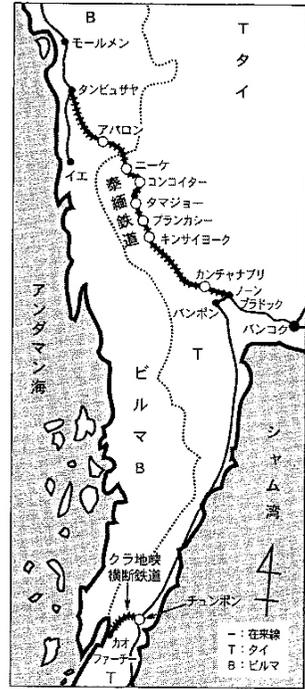
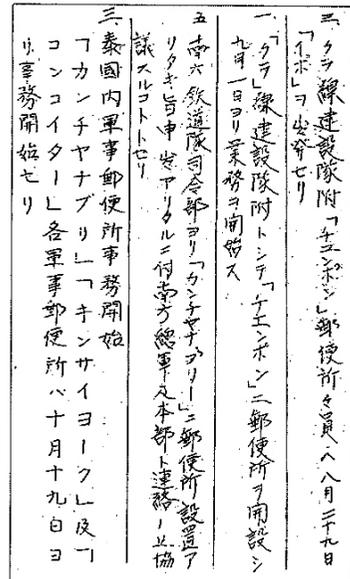


図1 泰緬鉄道・軍事郵便所の地図

図2 「戦時月報」の原文(抜粋)



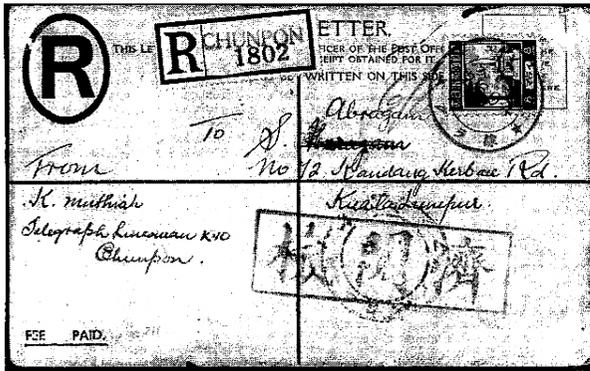


図3.「クラ地峡横断鉄道」郵便の書留封皮
(チュンポン2604.66, 月日手書き) (橋本道弘氏蔵)

各軍事郵便所ハ十月十九日ヨリ事務開始セリ

* 昭南・馬來軍政監部編「極秘 戦時月報・軍政月報 第五巻」龍溪書舎 2000年復刻版

この記述は、南方占領地切手研究家の一部には知られていた事実であるが、泰緬鉄道郵便と併せて特に稿を改めて書かれたことはなかった。また、海外の泰緬鉄道郵便の研究者には知られていなかった。この「戦時月報」は、当時マライ最高顧問であった徳川義親氏が、終戦前の1944年8月に日本に持ち帰ったものである。

文中の「チュンポン(チェンポン)」は、クラ線唯一の郵便所で、実際の郵便物として11通が残っており、泰緬鉄道とは異なるタイプの消印が使用されている(図3)。「イボ」とは、マライ北部の主要都市イポー(ペラー州州都)のことである。また、1943年10月19日に「軍事郵便所」を開局したのは3局となっているが、実際その日に開局したのはカンチャナブリ局のみで、他の2局は当初予定より遅れ、キンサイヨークは同年11月3日、コンコイターは11月7日に開局している。

では何故、開局は10月19日でなければならなかったのか? それはその日がまさに、タイが日本に協力することを条件に、永年同国が返還を要求していたマライ北部4州(ケダー、ケランタン、トレンガヌ、ベルリス)を、日本がタイ国に割譲した日であり、馬來告示第58号(1943年10月12日付)により、マライ占領地と、タイ国領となったそれら4州間の郵便業務が開始された日に他ならない。

「戦時月報」が占領当時に書かれた極秘の日本軍の公文書であるからこそ、この記述は泰緬鉄道の「軍事郵便所」郵便が存在した決定的な証拠である。

3. 発表された論文の根拠

過去に発表された泰緬鉄道郵便に関する論文は、その根拠がはっきりしないものが多い。それがおおよかに文献に掲載されたのは、E.B.Proud氏の *Japanese & Siamese Occupation Stamps of Malaya* (1961年10月発行)が最初である。しかしそこにはアパロン、キンサイヨーク、プランカシー、カンチャナブリ、タマジョーの5局の郵便所が開設されたという簡単な記述と、「キンサイヨーク軍事郵便所」の消印の印影がスケッチで紹介されているのみであった。

今回、著者のProud氏(英国在住、郵便史研究者)に照会したところ、この記述の下地となる研究発表が存在していたことがわかった。それは同氏が主宰していた *Japanese Occupation Society* が、1961年に発行した *Journal* (No.2. Vol.1)に掲載されたG.M.Harral氏(英国人収集家、Proud氏のマライ在住時の隣人)の5頁にわたる論文「THE THAILAND-BURMA RAILWAY, JAPANESE POST OFFICES」である。

そこには、マライの郵便局から泰緬鉄道の軍事郵便所局員として最初の3つの局に派遣された第一陣15人の一人として、キンサイヨーク局に勤務したPoh Ooh氏(後述)が書いた記事の紹介と、泰緬鉄道郵便7通(キンサイヨーク、カンチャナブリ、プランカシー、アパロン差出)の詳細が書かれている。残念ながら7通の図版はなく、上記キンサイヨークの消印だけが掲載されているが、その詳細な説明文から、現存する郵便物の中に3通の一致する郵便があることが確認されている。そしてこの論文はProud氏の1992年本*の記述内容のベースにもなっており、同氏自身もマライでPoh Ooh氏に会って記事の内容を確認している。

* M.D.Rowell, E.B.Proud共著 *THE POSTAL HISTORY OF THE OCCUPATION OF MALAYA AND BRITISH BORNEO 1941-1945*, 1992年

また、もう一つの重要な論文であるJ.S.Cheahの「Mail from the Death Railway」(*Japanese Philately*, Vol32, No. 3, 1977年6月号以下「JP誌」)には、「カンチャナブリ労務者郵便所」の謝蘇(Cheah Ah Soo)が差し出した郵便物が掲載されており、同局が1943年10月19日に開局したこと、同局には局員として3人の事務員と3人の雇員が

いたこと、などの具体的な記述がなされている。しかしそれらの情報が謝蘇から聴取されたもの、とは書かれていない。つまり裏付けがはっきりしない。

この点につき今回、著者のDr.Cheah Jin Seng (シンガポール大学医学部教授、同国切手博物館理事。同姓だがCheah Ah Sooとは無関係)に直接照会し回答を得た。すなわちこの論文の内容は、記事を書く前に直接謝蘇からベナンで聴取したものであること、掲載された郵便物は謝蘇から購入したものであること、謝蘇は太平洋戦争中、ベナン郵便局から泰緬鉄道のカンチャナブリ軍事郵便所に派遣され、戦後もベナンに住み、1~2年ベナン郵便局に勤務していたことなどを、Dr.Cheahが聴取していたというものであった。

4. 誰が派遣したのか？

「戦時月報」には、南方鉄道隊司令部がカンチャナブリに郵便所設置を申し出て、馬來軍政監部(1943年4月20日より南方軍軍政総監部の隷下)が、南方総軍及びその本部と連絡を取り合い、協議をして派遣を決めたとある。それでは実際には誰が、マレー人の郵便局員を泰緬鉄道の軍事郵便所に派遣したのだろうか？

実は、その証拠となる軍事郵便が存在するので

ある。図4は1943年10月当時、占領マライのペナン州郵政監督官兼ベナン郵便局長(同州郵政業務を所管-昭南・馬來軍政監部郵政局傘下)であった鶴田重蔵氏が「泰緬国境、岡五八〇一部隊カンチャナブリ軍事郵便所 チャーアースー」に宛てた軍事郵便はがき*である。この宛名の「チャーアースー」こそが、掲記の「謝蘇」その人なのである。しかも、このはがきの裏面にはカタカナによる日本語で、極めて注目すべきことが書かれている(当時のマレー人郵便局員は総じて英語ができたが、一部局員は日本語教育を受けていたため、鶴田氏はあえてやさしいカタカナで謝蘇宛てに書いたものと思われる)。

「オゲンキデスカ、ボクモゲンキデスカラ
ゴアンシンクダサイ。コノアイダハキレイナ
カレンダーヲオクツテクレテアリガタウ。カベニ
カケテマイニチミテイマス。ボクノコウニンノ
ヤマモトカンリカンニモ アナタガタノコトハ
ヨクタノンデオキマシタ。ポウオークン、オン
ケンリヤンケンニモ、ヨロシクオツタヘクダサイ。
ドウゾシツカリハタライテクダサイ。サヨ
ーナラ」

この軍事郵便はがきから、以下の重要なことが分かる。

- 1) 鶴田重蔵郵政監督官が、ベナン郵便局からチャーアースー(謝蘇、英文名: Cheah Ah Soo)、ポウオー(Poh Ooh)、オンケンリヤン(Ong Keng Liang)の3人の華系マレー人郵便局員を、カンチャナブリ軍事郵便所に送り出したこと。
- 2) 鶴田氏自身が、(少なくとも派遣する時点では)泰緬鉄道のカンチャナブリ局は「泰緬国境、岡第五八〇一部隊カンチャナブリ軍事郵便所」であることを、認識していたこと(5801部隊とは泰緬鉄道建設担当の第2鉄道監部)。
- 3) この軍事郵便はがきを出状したのは、鶴田氏の後任に山本(郵政)管理官が昭南から着任した直後(1943年11月上旬)であったこと。
- 4) 文面から、このはがきはカンチャナブリ軍事郵便所に着任した3人のマレー人郵便局員への初めてのはがきと見られることから、3人はカンチャナブリ局開局(1943年10月19日)前の、10月中旬に同地に着任したと思われる**。

* 1943年4月29日より、馬來軍政機関所属の軍人、軍属の私用軍事郵便は、速い送達を期するため、すべて郵政機関で取り扱うこととなっていた(「戦

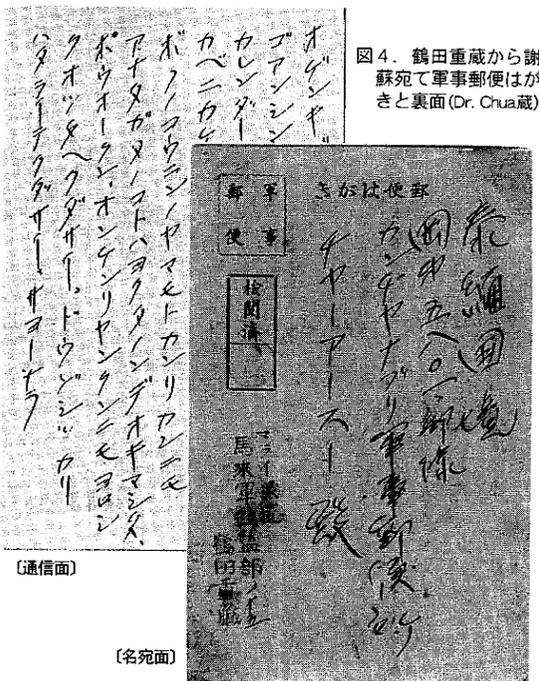


図4. 鶴田重蔵から謝蘇宛て軍事郵便はがきと裏面(Dr. Chua蔵)



図5. Poh Oohから家族宛て「軍事郵便所」郵便 (前Rowell氏蔵)

時月報」昭和18年5月号)。

** Proud 1992年本(前述)には「1943年10月10日に、ベナンから15人の郵便局員が、泰緬鉄道の各郵便所開設のために派遣された」と記されている(275頁)。

これに加え、Dr. CheahがJP誌に書いた「カンチャナブリ局の3人の局員(謝蘇の発言)」の中の一人在謝蘇であることを、Dr. Cheahが本人に確認している。

また、残存の郵便物から実際に、Cheah Ah Soo(謝蘇)差出の11通の郵便(すべてカンチャナブリ局からベナン宛)、Poh Ooh(傳記)差出の7通のはがき(すべてキンサイヨーク局からベナン宛-図5)、Ong Keng Liang(王景亮?)差出の3通のはがき(すべてベナン宛でカンチャナブリ局1通、コンコイター局2通)が実在する。さらに現存する郵便物を精査した結果、Poh Oohはカンチャナブリからすぐに移動してキンサイヨーク局に勤務、Ong Keng Liangはコンコイター局とカンチャナブリ局に勤務していたことが分かった。

5. 謝親子間の郵便

この謝蘇(別称:謝阿素, 英文名:Cheah Ah Soo, 1898~1979)と、その息子の謝根(別称:謝容根, 英文名:Cheah Yong Kim, 1921~現在)の間には、父親の泰緬鉄道カンチャナブリ軍事郵便所勤務時代に、ベナン在住の息子との間に往復の郵便が複数存在する。

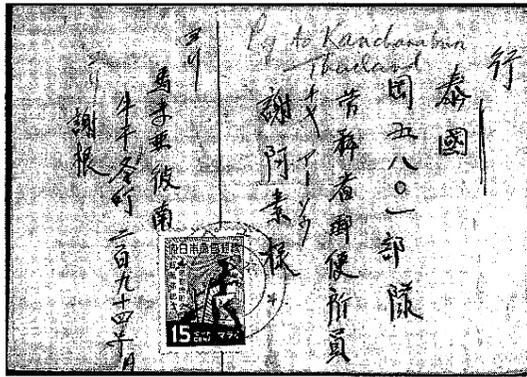


図6. 謝根から父親の謝蘇宛て2つ折りはがき(橋本氏蔵)

図6は、息子の謝根が父親宛に出した2つ折りはがきで、マライ郵便貯金百万弗突破記念15c切手が貼ってある。当時タイ国宛郵便は、はがきしか認められなかったため、厚手のレター用紙を開封の2つ折りにし、戦前のタイ宛封書料金が相当と見なして、15セント切手が貼ってある。消印はペナン2604.1.8(文面発信日2604.1.3, “2604”とは皇紀表示で1944年)で、ベナン局の検閲印が薄く押され、「泰國岡五八〇一部隊労務者郵便所員謝阿素(チャーソウ)宛となっている。通信文が英文のこの手紙の中で、「母親に(1944年)1月1日に子供が生まれたこと、粉ミルクを送って欲しいこと」などが書かれている(橋本道弘氏が1991年にベナンにおいて、差出人の謝根氏からこのはがきを直接購入した。南方占領地切手研究家の橋本氏と守川環氏は、謝根氏に会った際に、父親の謝蘇がカンチャナブリ軍事郵便所に勤務していたことを確認している)。

これに対する返事(マライ正刷4cはがき)が図7である。消印はカンチャナブリ2604.2.8(文面日付は7th Feb 2604)で、カンチャナブリ局の紫色大型検閲印が押され、泰國干差那武里労務者郵便所の謝から、ベナン在住の息子の謝容根(Cheah

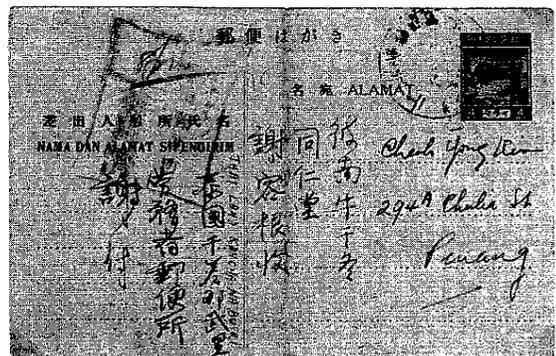


図7. 謝蘇から息子の謝根宛て「軍事郵便所」郵便 (Dr. Chua蔵)

Yong Kim)宛に送られている。はがきには「あなたの1月3日付(注:掲記2つ折りはがき)と15日付の便りを受け取った。お母さん(自分の妻)と生まれた子供が元気になって良かった。(粉)ミルクに関しては郵便で送れるかどうか心配だが、送ってみる。」などと英語で書かれている。

この往復書簡もまた、泰緬鉄道軍事郵便所が存在した動かし難い事実を物語っている。

6. 誰のための何を送る郵便だったのか?

筆者が調査した泰緬鉄道郵便は149通におよぶ(マライ正刷はがき50通, 軍事郵便はがきを使用43通, 私製はがき23通, 書留26通, 郵便貯金通帳1通, 等。その中にジャワ宛はがき6通あり)。その差出人, 宛名, 文面から, 差出人の職業が次のように多岐にわたっているということが判明した。郵便局員-60通, 鉄道用品庫員, 機関士, 検車係, 保線員, 操車場係, 電信係, 電気庫係, 輸送部員等の鉄道従事者-57通, 労務者-19通, 通訳-1通, 労務者病院関係者-1通, 不明-11通である。

はがき文面から, 近況報告や安否問い合わせ以外に, マライの留守宅宛て生活費仕送り, 粉ミルク, 粉末コーヒー, 旧正月の子供用お年玉や, 収集用のタイ国切手までが送達されている。

これらの事実から分かるように, 泰緬鉄道における「軍事郵便所」とは, その名称にも拘わらず, 実態は従来の日本軍人による日本軍人のための無料郵便機関である「軍事郵便所」, 「野戦郵便所」とは全く異なる, 「軍用鉄道」のための「郵便所」であり, かつ鉄道完成後に, 鉄道保守, 列車操車, 機関区・駅務補助, 鉄道用品管理, 郵便業務等に携わったマレー人, ジャワ人等の, 日本軍に徴用された極めて限られた現地人(鉄道建設用労務者ではない)

のための, 「労務者郵便所」であったのである。

7. むすびに

前述したように, 1943年10月当時の占領マライの郵政は, 昭南・馬來軍政監部郵政局(通信省出身文官)→マライ各州郵政監督官(日本人の郵便局出身者)→各郵便局, 郵便所(マレー人郵便局員)という通信省系列の指揮命令系統となっていた。同じように, 泰緬鉄道の「軍事郵便所」も, その時々日本軍部隊に所属してはいたものの, 実態は民政の通信省系列のマレー人郵便局員による運営であったところに, その特異性があった。消印に日本陸軍のシンボルである星章ではなく, 通信省の「〒」マークを用いた(図5, 7)のは, このためであると思われる。

日本人のための郵便ではなかったため, 日本人が差し出すことも受け取ることもなかった。日本の敗戦とともに関係書類や記録は処分され, 150通近くの郵便だけが残った。そしてその大部分が, Rowell氏などごく一部の海外著名収集家のコレクションとして, 1990年代初めまで永く留まったことが, 特に日本国内で泰緬鉄道郵便を「謎の多い郵便」にしてしまった。

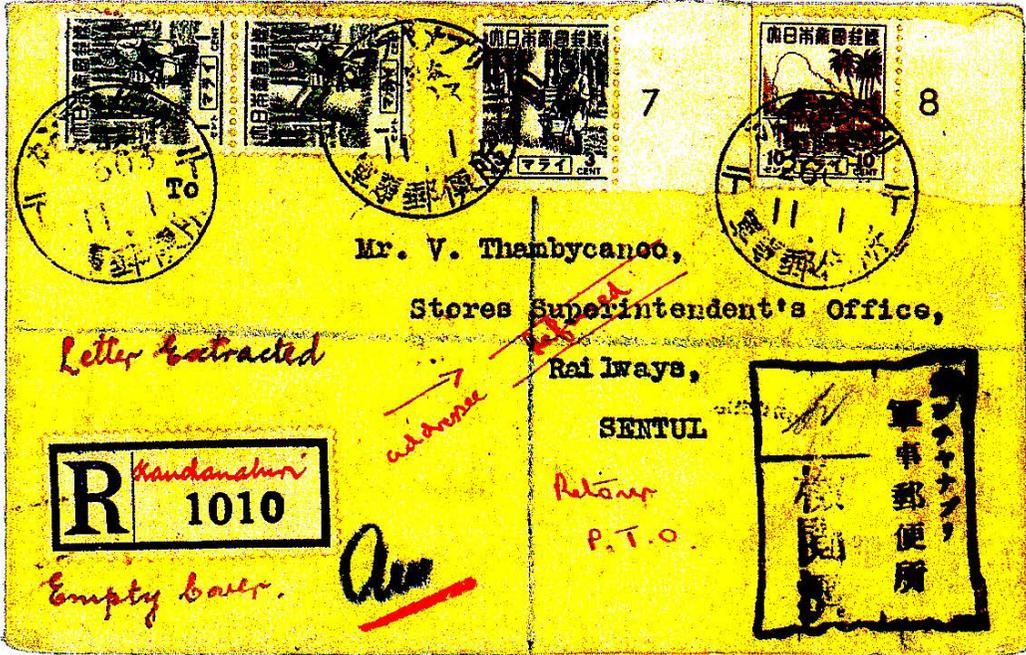
紙数の制約のため, 調査した149通におよぶ郵便物の細かいデータ(各局消印, 検閲印の印影, 使用切手, 文面使用言語, 兵団文字符・通称番号入り郵便-52通, 等)や郵便料金の解説などは割愛した。泰緬鉄道郵便の全貌については, 別途「ブックレット」として刊行の予定である。

なお本稿については, Proud氏(英国在住), Dr. Cheah(シンガポール在住), Dr. Chua Hock Khoon(マレーシア・ペナン在住-現ペナン郵趣協会会長), 橋本道弘氏に格別のご協力をいただいた。

図8. 泰緬鉄道郵便所の最初期・最後期使用日

(03=皇紀2603=西暦1943年)

欧文局名	和文局名	最初期使用日	最後期使用日
【泰緬鉄道郵便所】			
Apalon	アパロン	28?. 10. 04	? . 6. 05
Kanchanaburi	カンチャナブリ	19. 10. 03	13. 7. 05
Kinsaiyoku	キンサイヨーク	3. 11. 03	22. 2. 05
Konkoitah	コンコイター	7. 11. 03	27. 1. 05
Nieke	ニーケ	? . 9. 04	15. 2. 05
Purangkashi	プランカシー	26. 5. 04	24. 6. 05
Tamajo	(タマジョー)	? . 5. 04	? . 1. 05
【クラ地峡横断鉄道郵便所】			
Chunpon	チュンポン	20. 11. 43(03)	4?. 9. 04



マライ正刷切手4枚を貼ったカンチャナプリからマライ・セントルの鉄道用品庫宛て書留便(消印・カンチャナプリ 2603.11.1)、裏面・マライIPOH 11.19.2603、クアラランブール 2603.11.20、セントル 2603.11.22、セントル 2603.11.24、クアラランブール 2603.11.24、カンチャナプリ 2603.12.7(差出人戻し)



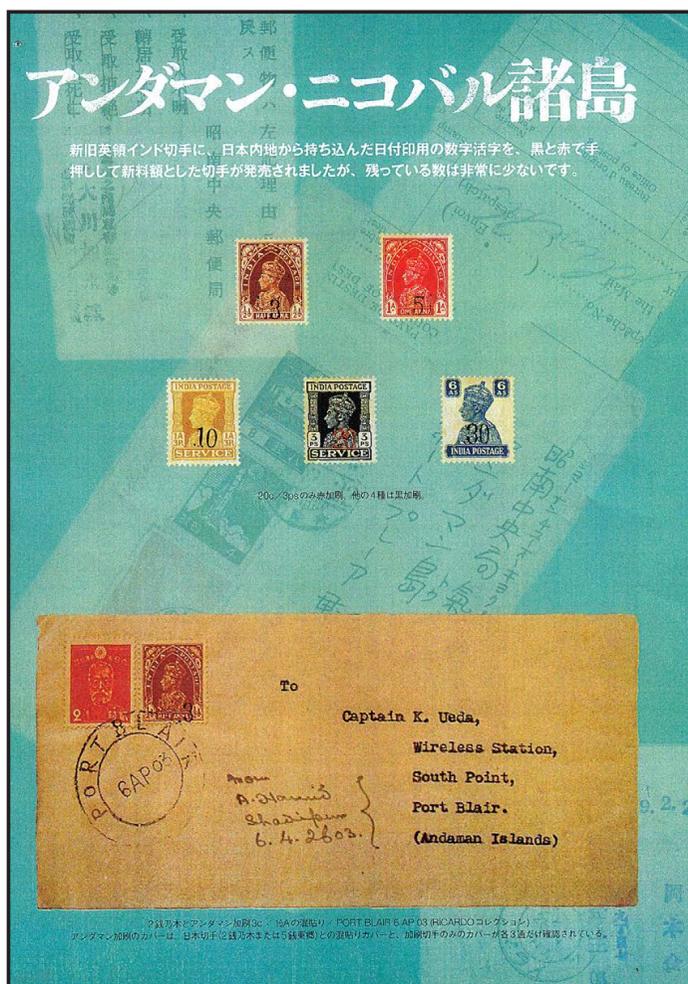
マライのペナン郵便局から派遣されたキンサイヨークの局員 Poh Ooh からペナン中央郵便局の局員宛て葉書(消印・キンサイヨーク 2603.11.3 開局初日カバー)占領マライの正刷葉書を持ち込み使用している。

140回 稲門フィラテリー切手教室 レジュメ2

2018年3月3日

歴史秘話 南方占領地の切手と郵便

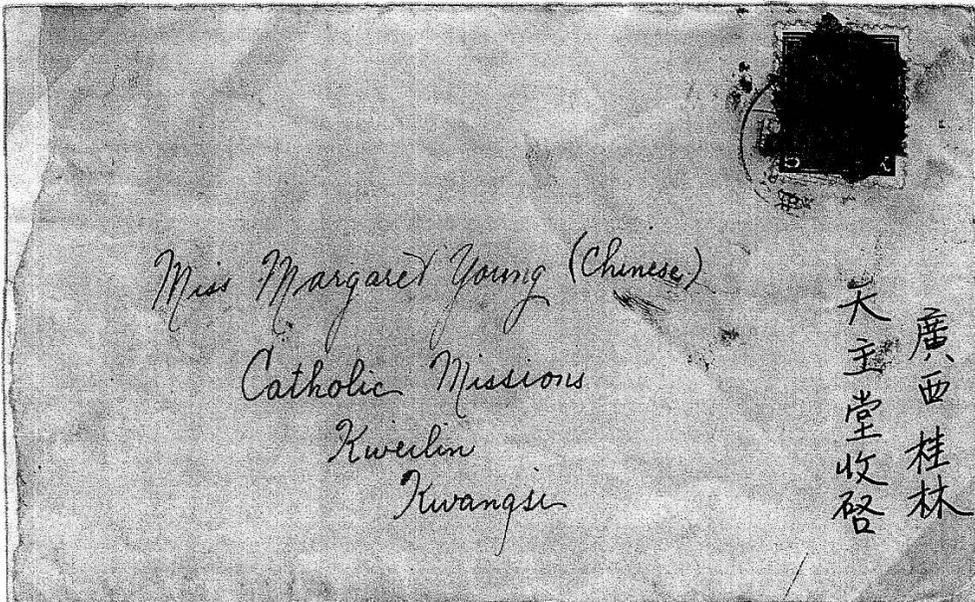
土屋 理義



黒塗りされた日本切手

この郵便は、「九龍塘(昭和18.4.30)」の消印ですが、宛先の中国桂林の天主堂(カトリック教会)に送られる途中、日本軍占領地域を出た後、中国側の受取局で日本切手5銭の東郷平八郎の肖像が墨で塗りつぶされています。これは日本軍の香港占領を認めない中国側が、香港からの郵便物に貼られた日本切手を黒く塗りつぶして配達したためです。

しかし、貼られた切手そのものが無効とされたわけではなく、切手が塗りつぶされているという理由で、受取人が不足料金を徴収されることはありませんでした。このようなことが行われたのは1942年(昭和17)11月から43,44年(昭和18,19)の一定期間における桂林などの特定地域のみで、その後切手の塗りつぶしがなくなったのは、中国側の中継局または配送地域が、日本軍の支配下になったためと思われます。



九龍塘消印の印面抹消カバー

印鑑だけの矢野切手の誕生

日本軍占領時の戦禍による略奪で、ビルマの首都ラングーンの中央郵便局には、英領ビルマの切手はほとんど残っていませんでした。いっぽう、郵便の再開は1942年(昭和17)6月1日と決められました。そのため、ビルマ郵政再建委員長の矢野静雄(日本の通信省から派遣された郵政担当者)は思案にくれました。何とか切手を作って郵便局の窓口から販売しなければならぬ…。

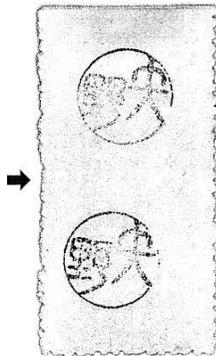
そこでハタと思いついたのが、自分が日本から持参した水晶製の印鑑(実印)でした。白色用紙に目打(ギザギザ)を入れ、郵政責任者である自分の印鑑を押す…。

そうだ、これだ!

矢野の部下であった牧野公一や青井武雄らが、ラングーンの軍政部郵電課の部屋で、5月28日、29日の両日に急きょ、ビルマ製の朱肉を使って押捺、裏糊も付けずに製造しました。こうして、国名も額面表示(郵便料金を示す数字)もない、世界に類を見ない個人の私印を押しただけの切手、通称「矢野切手」が誕生したのです。



矢野切手の単片



横目打もれ



矢野静雄の写真

認印切手が次々に登場

マライ占領切手で特徴的なことの一つは、占領当初に認印加刷（正確には押捺）切手が次々に登場したことです。日本占領直後、マライの郵便局には大量の英領マライ切手が残っていました。しかし日本軍が英領の切手をそのまま使用することはできません。そこで考えられたのが、占領地に赴いた日本人が必ず携行していた個人の認印を切手に押すことでした。

ペナンでは1942年3月30日、ペナン政庁財務課長であった奥川亮（あきら）の認印「奥川」が切手に加刷されました。さらに、数は少ないですがフルネームの「奥川亮」印も使用されています。またそれらと併用して、同政庁出納役の内堀信治（のぶはる）の「内堀」印が使われています。

同年6月にはマライ北部のケランタン州で、同州知事であった司政長官の砂川泰（たい）陸軍少将の私印「砂川」を押した切手が発行されています。同州では、南方総軍参謀部の官房主事であった半田新十郎の「半田」印も加刷されました。

これらの認印加刷のうち、「奥川」「内堀」「砂川」には、葉書や封皮に押したものも少数存在します。



Type I



Type II



Type III



「奥川」加刷の3つのタイプ



「奥川亮」加刷



「内堀」加刷



「砂川」加刷



「半田」加刷

前田島カバーとは？

占領北ボルネオに「前田島」という消印があります。1942年9月5日、クチンからラブアンに向かう途中で事故で墜落死した北ボルネオ軍司令官の前田利為陸軍中将の名を取って、同年12月9日にラブアン島は前田島と改名されました。前田中将は旧加賀藩主前田本家の第16代当主（侯爵）で、死後正二位に叙せられ陸軍大将になっています。

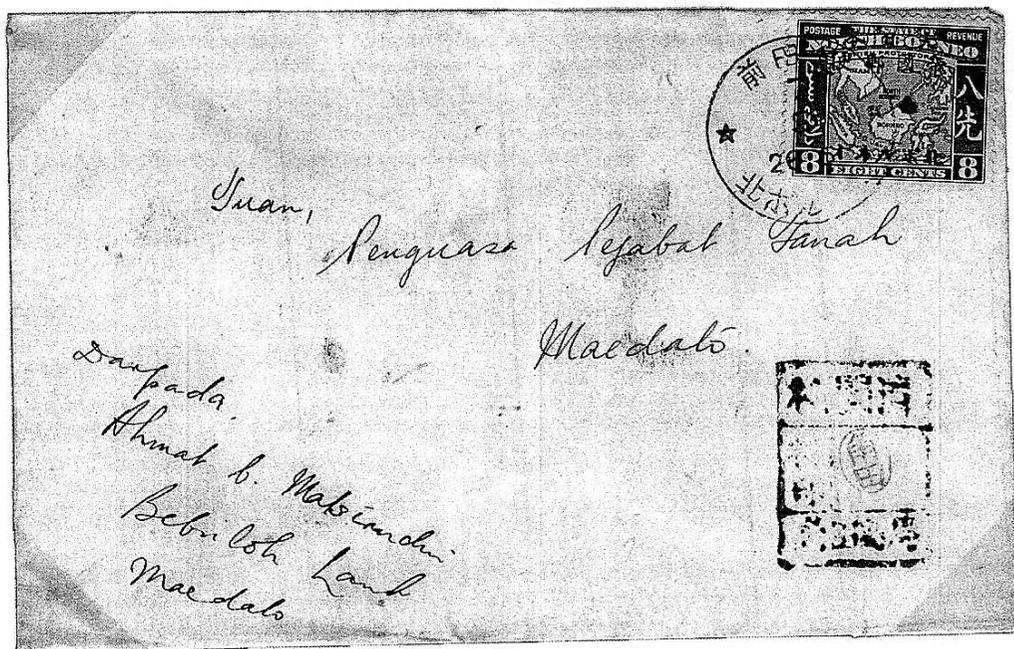
このカバーは前田島の消印が押された島内便で、「検閲済・前田島局」の検閲印に「角田」の検閲者印が押されています。1945年6月10日にオーストラリア軍が同島に上陸していますが、郵便業務の最終日は同年5月7日で、これは前田島のラストデー・カバーです（最初期使用例は1943年11月18日）。

前田島カバーはわずかしか残っていません。使用切手は活字3行加刷の3セント、8セント（下図）、20セント、日本切手の5銭東郷、8銭神宮、15銭少年航空兵、4セントと8セントの正刷普通切手が知られています。

なお、日本軍占領中に一時的なものも含め、島名が日本名に改称された例として、前田島（ラブアン島）の他に、昭南島（シンガポール）、東條島（ペナン島）、大宮島（グアム島）などがあります。



前田利為陸軍中将



前田島ラストデー・カバー(7.5.2605)

図4 バレンバン州・ローカル加刷の例

Roesli PAGARALAM



バガララム郵便局書記 Roesliのサイン

SLM BATOERADJA



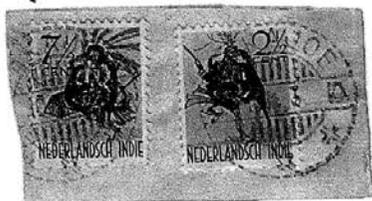
バトラジャ郵便局長 Mas Slametの頭文字 SLMを組み合わせたゴム印による加刷

TANDJONGRADJA
TANDJONGRADJA



地名 (TANDJONG RADJA) を2枚の切手に加刷

BST SEKAJOE



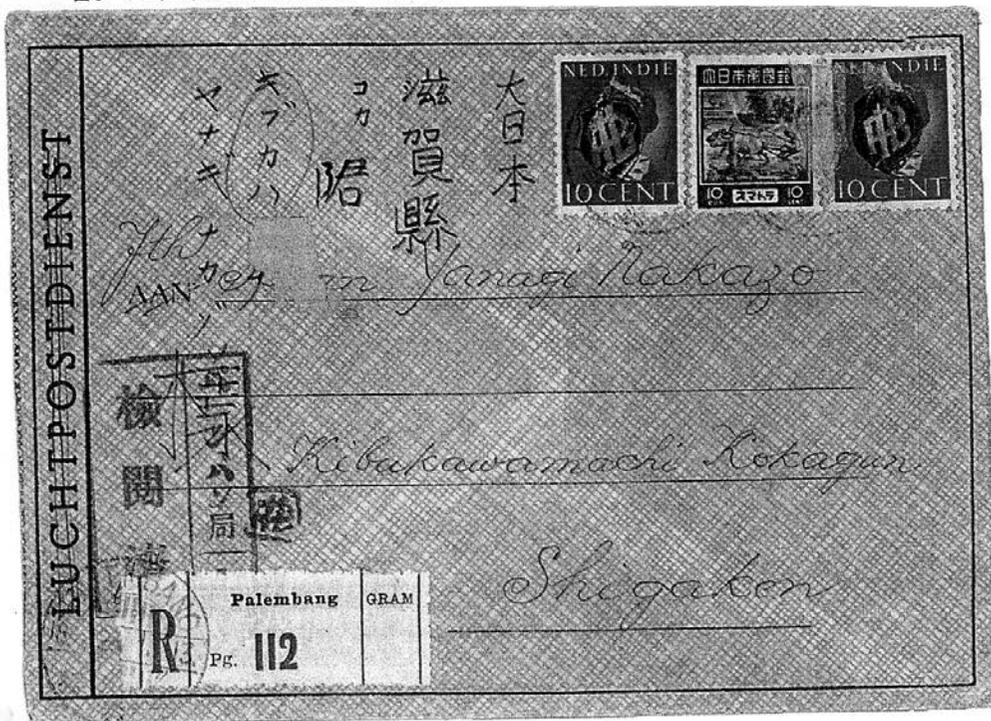
スカユ郵便局長 Boestamの金指輪 "BST"のモノグラム加刷

AR LOEBOEKLINGGAU



ル布林ガウ郵便局長 Arifinの "AR"を組み合わせた金指輪加刷

図5 IPLリング青加刷 新女王10c・2枚貼り、PALEMBANG 18.12.1から昭南経由・滋賀県宛て実通書留便



プロパガンダ絵葉書—“英米を一刻も早く倒そう”

1943年(昭和18)12月に発行された小型の「郵便はがき」に、銃を持つ兵士と日本の鳥居、軍用機、日の出の図案と共に、インドネシア語で「祖国の再建に献身せよ」の文言が印刷されています。裏面左上には小さな文字で「軍用機を購入して人民軍を助けるためにこの葉書を買って、敵である英米を一刻も早く倒そう」と書かれています。

理由は分かりませんが、このプロパガンダ葉書はごくわずかしが発売されなかったため、実際に郵便として使われた例は非常に少ないです。



プロパガンダの文言 →

● Membeli kartoepos bergambar ini, berarti kita membantoe Pembelian Pesawat Terbang, sebagai soembangan Pembelaan Tanah Air dan mempercepat roentoehanja Inggris dan Amerika.

Shain 8/12
Harap kasi kase
mana dan sanda
aa: moe jang
Oma d'rosinta
sakit kerao. Keri
petach p'isem
mamis' taule
Shien
差出人住所氏名
NAMA DAN ALAMAT, SIPENGIRIM
K. A. Guntkenberg
Kemajoran 3/6 Dava

郵便はがき

KARTOEPOSA

SOERABAJA
8.12.03
DANIPPON

Kepada anahanda
Nons N. Widdeloop
Baudstraat no 24.
Soerabaja

2通しか残っていない実郵便(SOERABAJA 8.12.03)

ロンボク太陽加刷

小スンダ列島のロンボク島では、1943年2月から5月までのわずか4ヵ月間、太陽を表す特異な加刷切手が使用されました。上方に「大日本」、下方に「ロンボク」、中央に太陽が描かれています。まず黒加刷が使われ、紫加刷、赤加刷、赤紫加刷の順に出現しています。太陽を用いたのは海軍のシンボルの軍艦旗をイメージしたのかもしれませんが。最初に黒加刷がなされ、すぐに紫、赤、赤紫の加刷に替わっていったのは何故でしょうか？これは推測ですが、赤紅色の新女王10セント（当時の封書の基本料金）への加刷を考え、最初は同系色を避けて黒加刷を試みたのではないのでしょうか？しかしその後すぐに、軍艦旗に似せた加刷が「黒枠付き」では縁起が悪いとクレームがつき、黒色から紫色に替え、さらに軍艦旗の色に似た赤、赤紫に変更したのではないかと思われまます。

同年5月下旬に鑑加刷の配給が始まり、この加刷の使用は終わりました。加刷切手として郵便局の窓口から売られたのではなく、封書や郵便為替証書に貼られた台切手の上に、そのつど加刷されたので、この加刷切手が押された未使用切手はありません。太陽加刷がなされた葉書も使用されていますが、いずれも蘭印占領地の切手と葉書の中で希少なものの一つです。



黒加刷(現存6枚)



赤加刷



赤紫加刷



日本海軍の軍艦旗

フロレス切手



未使用

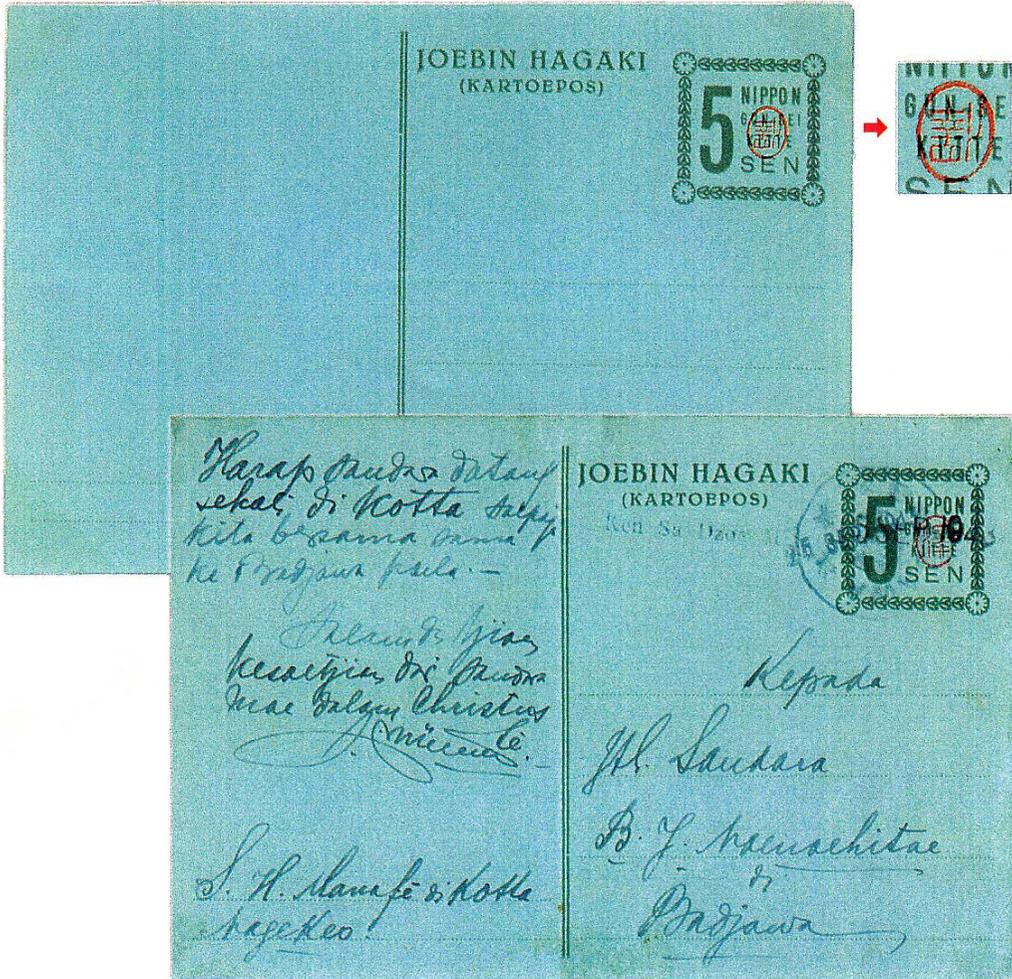


ENDEH(フロレス島)



WAINGAPOE(スンバ島)

フロレス葉書「澤」認印逆押し



Nagekeo 5.SEP 1943, BADJAWA 25.SEP.1943, "JOEBIN HAGAKI(郵便葉書)"の下に "Ken Sa Dzoë Mi(検査済)"のローマ字が黒色で押印されている。

米軍マニラ突入時の押収品

左は発行された「英雄切手」の小型シート（発行日・1944年2月9日）のバラエティで、マニラ中央郵便局に保管されていたものが、1945年（昭和20）2月の米海兵隊のマニラ突入の際に押収され、戦後、切手市場に出回ったものの一つで、5cが逆刷されています。

右は正規の小型シートとは別で、それよりやや縦寸法が短く、印面の枠取りが二重で文字が緑色（正規のものは濃い茶色）の未発行小型シートです。これも米海兵隊がマニラ突入の際に少数押収したもので、戦闘時に一部が火で焼けた跡のあるシートです。未発行の理由は、発行予定日「DISYEMBRE 30.1943」を入れた小型シートが出来上がったものの、3種の単片切手の製造が遅れて（切手発行日は目打ありが1944年2月7日、無目打が同年4月17日）、1943年12月30日（フィリピン革命の父とあがめられたリサルが処刑された「リサル祭り」の日付）を過ぎてしまったため、文字通り「お蔵入り」になってしまったのではないかとされています。



発行された小型シートのバラエティ (5c逆刷)

一部が火で焼けた未発行小型シート

南方地域全般

IRASHI
HANOI
1918

南方地域全般にわたる日本切手の使用や、切手や郵便にまつわる面白いエピソードを紹介します。

日本切手が使われた

太平洋戦争中(1942年~1945年)の日本の南方占領地において、日本切手の使用はどこでも有効でした。香港(無加刷、新料金暫定加刷)、ビルマ(無加刷、アンナ・ルビー加刷、セント再加刷、セント加刷)、マライ(無加刷、TRENGGANU加刷)、北ボルネオ(無加刷、北ボルネオ加刷)、蘭印(旧オランダ領東インド)スマトラ(無加刷、大日本枠付き加刷、アチエ州星加刷)、蘭印・海軍担当地区(無加刷)では、郵便局窓口から売られています。またフィリピンでは窓口からの販売はありませんでしたが、持ち込み使用が知られています。さらにアンダマン島(乃木2銭、東郷5銭)、泰緬鉄道(法隆寺25銭)でも、ごく少数の持ち込み使用例があります。中にはスマトラの東海岸州とパレンバン州のように、日本切手にわざわざ「大日本」を加刷したものまであります。

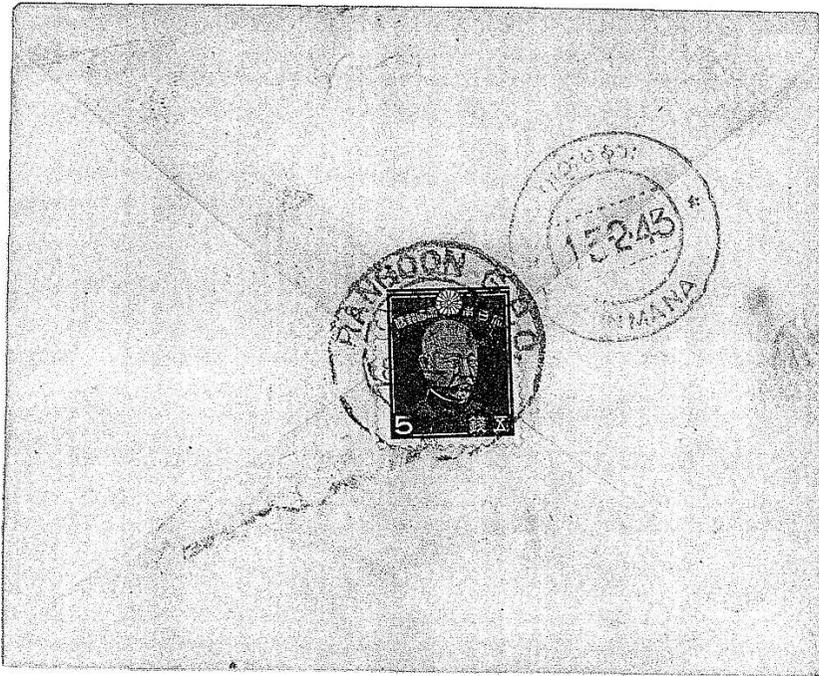
日本切手の使用は、現地残存切手の不足を補う、占領地にいる民間在留邦人の日本宛郵便への使用勧奨や、日本の占領を広く現地人に周知させる意図があったといわれています。



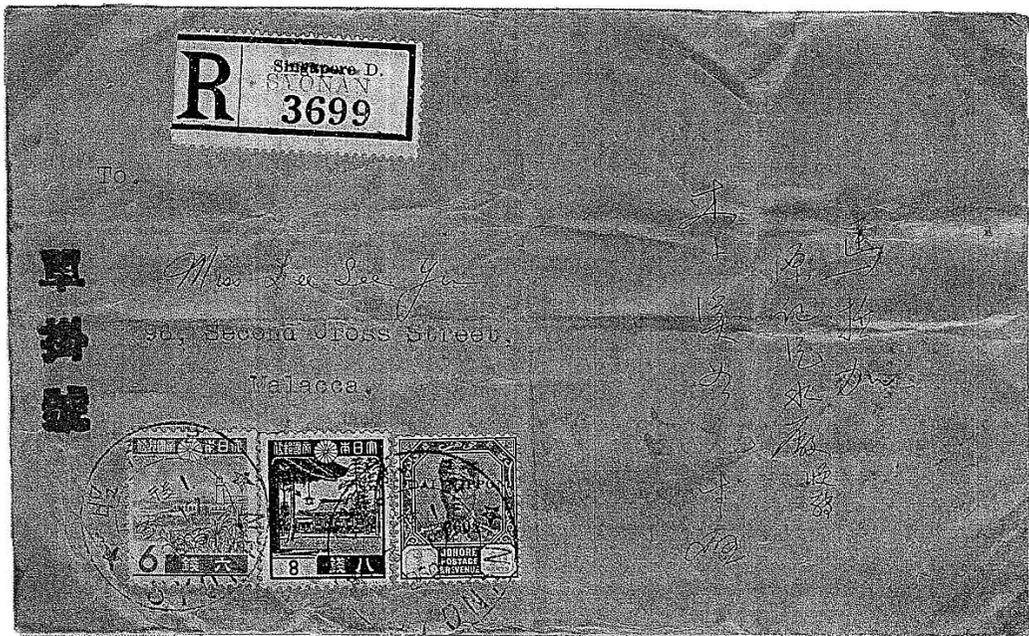
香港 20銭富士桜／九龍城(昭和)7(17).8.14、九龍經由 仏領インドシナ・サイゴン宛て



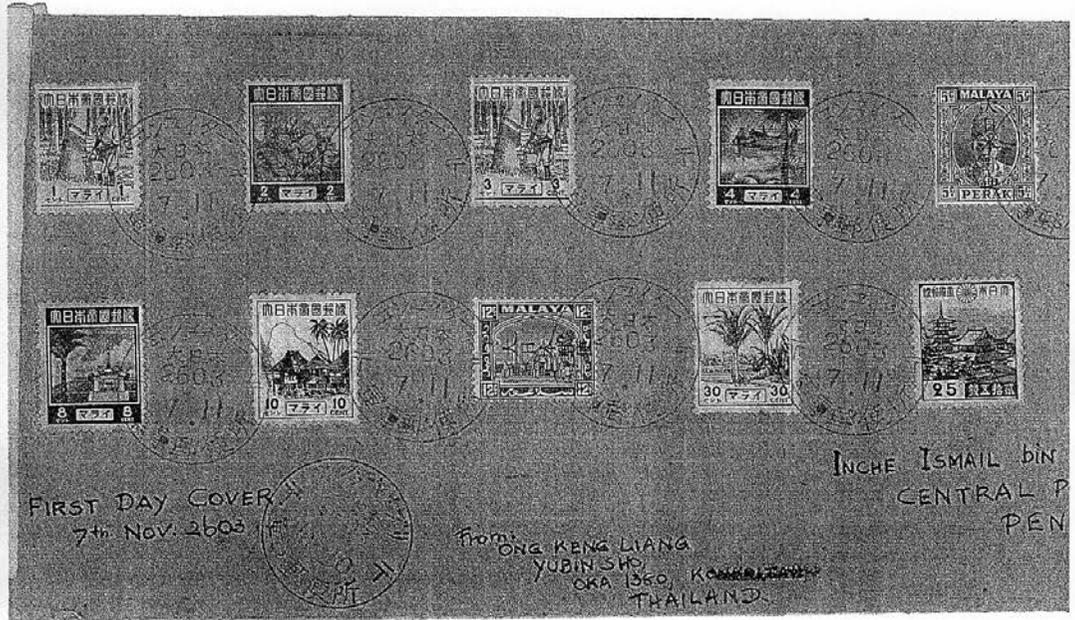
九龍城の実通便には必ず集配局の九龍局の中継印がなければならない。



ビルマ 5銭東郷/Rangoon G.P.O.DELY. 9 FEB 43のPYINMANA 13.2.43宛て



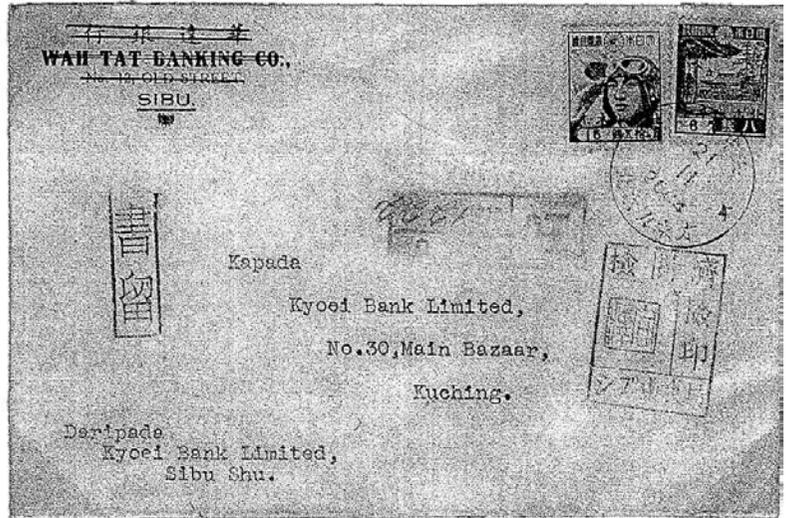
マライ 6銭灯台・8銭神宮・ジョホール・ローマ字加刷10c/昭南3.17.2603、マラッカ宛て書留便



泰緬鉄道 25銭法隆寺・マライ正刷7枚・マライ漢字加刷3枚の11枚貼り
 リ/コンコイター 2603.11.7、マライ・ペナン郵便局長宛て、初日書留便
 裏面 IPOH 11.19.2603の中継印、ペナン 2603.11.20の到着印

北ボルネオ 7銭金剛山3枚・2銭乃木1枚貼り/
 クチン 18.3.13、昭南宛て書留便(久鎖憲兵分隊検閲印)

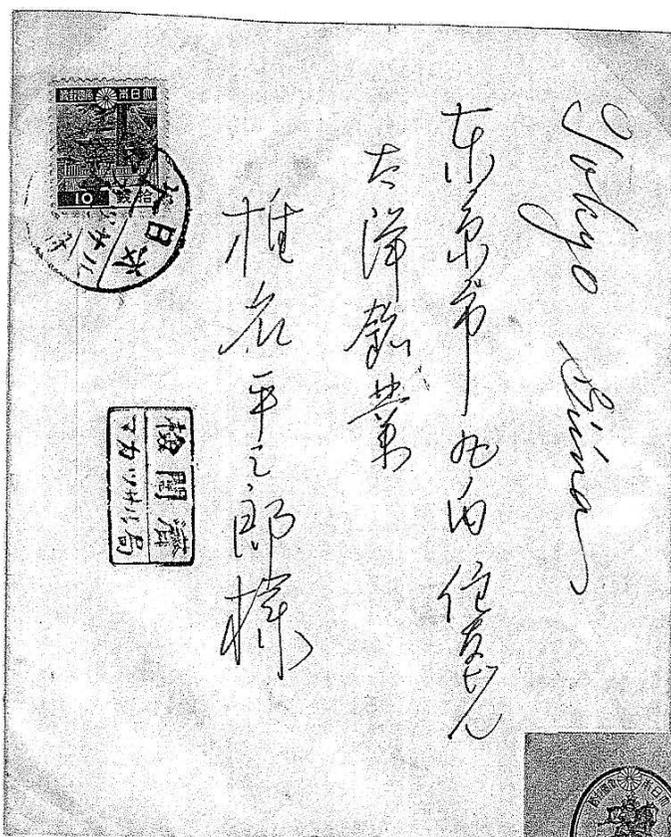




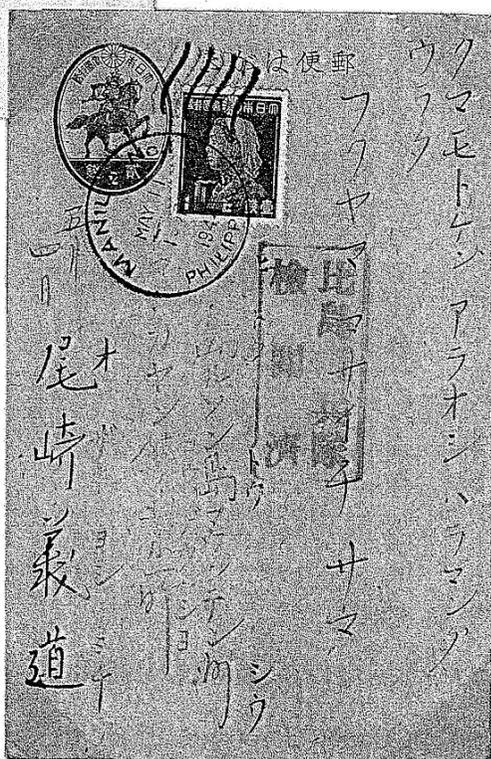
北ボルネオ「北ボルネオ」加刷8銭神宮・15銭少年兵／志布中央21.11.2804、クチン宛て書留便



蘭印スマトラ「大日本枠付き」紫加刷3銭発電所／郵便為替証書／グメントア・タバヌリ19.5.15



蘭印 海軍担当地区
10銭東照宮／マカッサル
(南セレベス)、東京宛て



フィリピン 1銭女子工員
／マニラ MAY 11.1944、熊
本県荒尾市宛て楠公葉書
差出地のマンカヤン鉱業所
は、日本軍占領中、三井鉱
山が委託を受け開発、増産
した銅山であった。

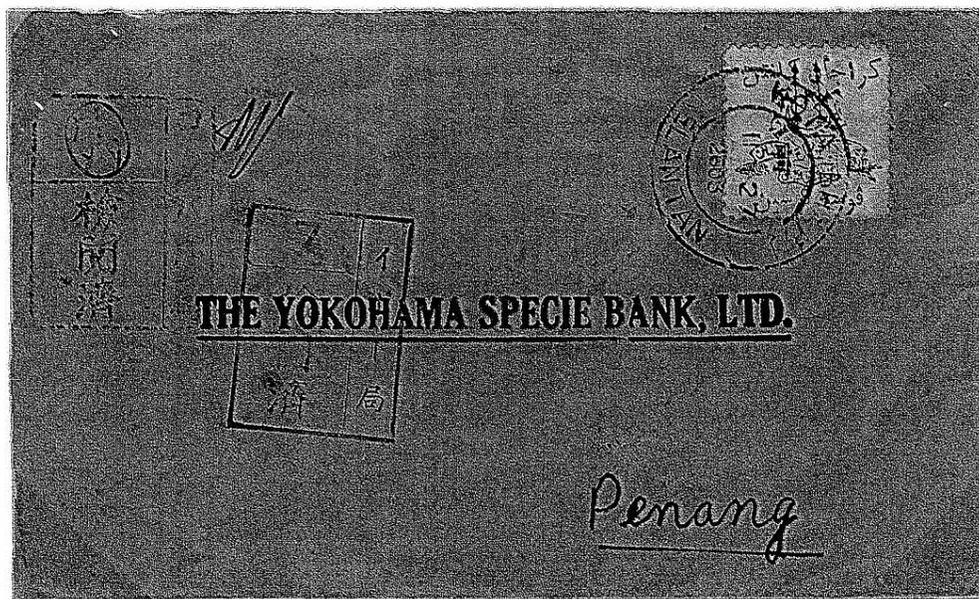
横浜正金銀行の光と影

南方占領地切手を貼った「横浜正金(しょうきん)銀行」または“THE YOKOHAMA SPECIE BANK,LTD.”と書かれた郵便物を見かけることがあります。南方占領地域には、日本の軍人以外にも、多くの民間邦人(商社、銀行、海運、鉱業関係者など)がおり、これらの人々に便宜を図り、さらには日本政府の要請にもとづき、民生と現地金融秩序の安定のため、外国為替専門の横浜正金銀行が拠点を選んだのです。

「横浜正金銀行全史」によると、太平洋戦争中の南方占領地域において、同行は接収した現地金融機関も含め、実に80の拠点網(香港2、ビルマ13、マライ12、タイ占領下マライ3、北ボルネオ10、スマトラ17、ジャワ22、フィリピン1)を展開しています。

しかし、南方占領地での銀行勤務は過酷なものでした。同行昭和20年上半季報告には以下の記述があります。「…北ボルネオ地区では、戦局の進展につれ空襲激化、為に営業所の破壊焼失するもあり、豪軍上陸するに及び、各店は(昭和20年)5月中旬より逐次退避乃至転進し、辛酸を嘗めつつ遂に終戦となった。…此の間、スマトラ1名、ボルネオ7名の犠牲者を出したことは誠に遺憾であり、犠牲者に対し衷心より哀悼の意を表する次第である。…マニラ支店は20年1月6日閉鎖、支店全員脱出後各地へ転進、気力、体力共に衰え、9月下旬収容所に入りたる者僅か5名で、11名の犠牲者を出した。」

戦後、横浜正金銀行は東京銀行へと生まれ変わり、東京三菱銀行から三菱東京UFJ銀行となって今日に至っています。



タイ国に割譲されたマライ北部4州の一つであったケランタン州の横浜正金銀行コタバル出張所から、マライの同行ペナン支店に送られた実郵便。ケランタン州の紋章をデザインした8セント切手が貼られている。消印・KOTA BHARU 11.27.2603(皇紀2603年—1943年11月27日)コタバル局とマライ・ペラー州のイボー局で検閲。

グアム島も南方占領地だった!

太平洋戦争勃発直後の1941年(昭和16)12月10日、日本軍はマリアナ諸島南端の最大の島であるアメリカ領グアムに上陸し全島を占領、海軍が警備隊を編成し、明石(日本占領中のアガナの呼称)市に司令部を設置しました。そして翌年2月には島名を「大宮島」(通称おおみやじま、正式呼称はだいきゅうとう)に変更したのです。グアム島は北緯13度、フィリピンのルソン島と同緯度であり、広義では日本の南方占領地と言ってよいでしょう^{注1}。

占領から約1年を経た1942年(昭和17)12月1日から民間郵便物、為替貯金業務の取り扱いが開始されました。当時邦人数は400名余りで、在留邦人への便宜のためでした。郵便局は明石にあった元グアム銀行のビルを接收し、サイパン郵便局大宮島分室(消印上はサイパン郵便局移動分室)としました。

同日から1943年4月30日までの5ヵ月間、同名の「サイパン郵便局移動分室」が、サイパン島と大宮島(グアム島)の2ヵ所に存在しました(消印上は「郵」と「局」の字体により区別可能^{注2})。しかし1943年5月1日から、日本の南洋庁は「移動分室」を大宮島は「サイパン郵便局第一移動分室」、サイパン島は「サイパン郵便局第二移動分室」に分割しました。

戦時下であり在留邦人も少なかったことから、占領グアム(大宮島)で使われた現存の郵便物は非常に少ないのです。確認されている使用日本切手は大正池5銭のみです。

日本軍による統治は、1944年8月にアメリカ軍が奪還するまで2年8ヵ月に及びました。アメリカ軍は日本軍が使用していた基地を拡張し、戦争終結までの間、日本本土爆撃の拠点として使用しました。

戦後の1950年にグアムはアメリカの準州となり、現在までアメリカにとって太平洋戦略上の重要な軍事基地として使われています。1960年代以降は日本からの観光客を中心とした観光地、リゾート地としても発展していますが、1972年(昭和47)1月に同島のジャングルで、残留日本兵の横井庄一さんが終戦後26年半ぶりに発見され、日本に帰還したことで有名になりました。

注1:当時のサイパン、パラオ、テニヤンは日本の委任統治領であり、南方占領地ではありません。

注2:2つの「サイパンー移動分室」消印上の「郵便局」の「郵」と「局」の違い

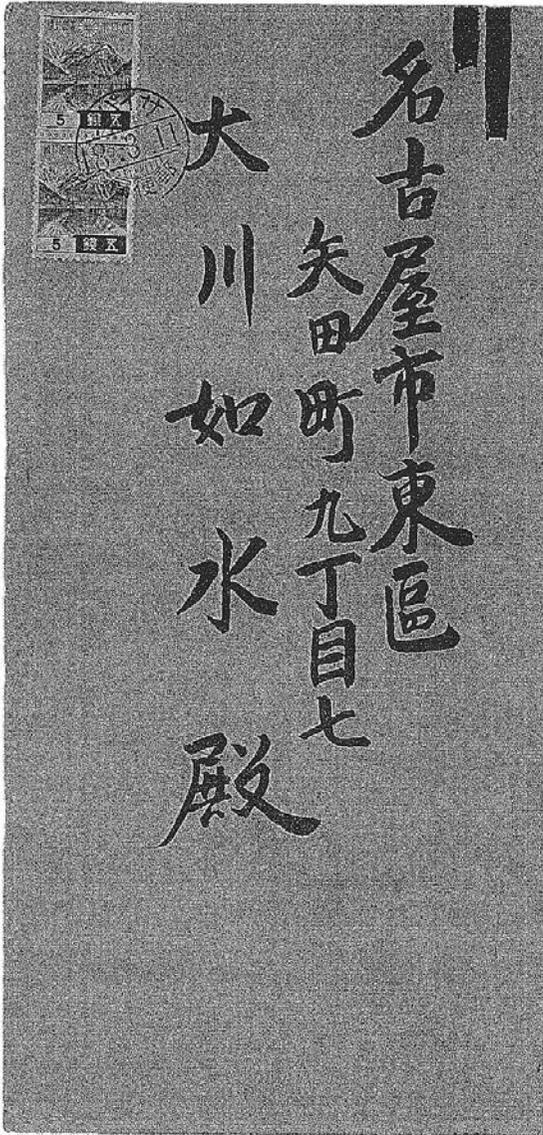
サイパン局の消印



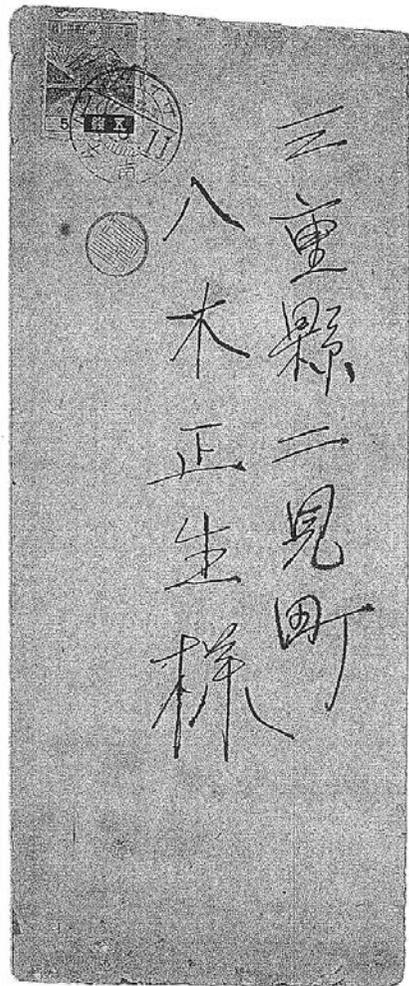
グアム・大宮島局の消印



(萩原海一「大宮島(グアム)の郵便局について」郵趣研究88号より転載)



大正池5銭2枚貼り・サイパン郵便局・移動分室(大宮島)(昭和)18.3.11消印、名古屋の著名な収集家・大川如水宛て。右上の抹消線2本は、残存していた「BANK OF GUAM, AGANA」の封筒を再利用し銀行名を抹消した部分。この銀行に大宮島郵便局を設置した。



大正池5銭1枚貼・サイパン第一移動分室(大宮島)・南た(昭和)19.3.11為替印、三重縣二見町宛て、検閲印・板垣(大宮島郵便局長)

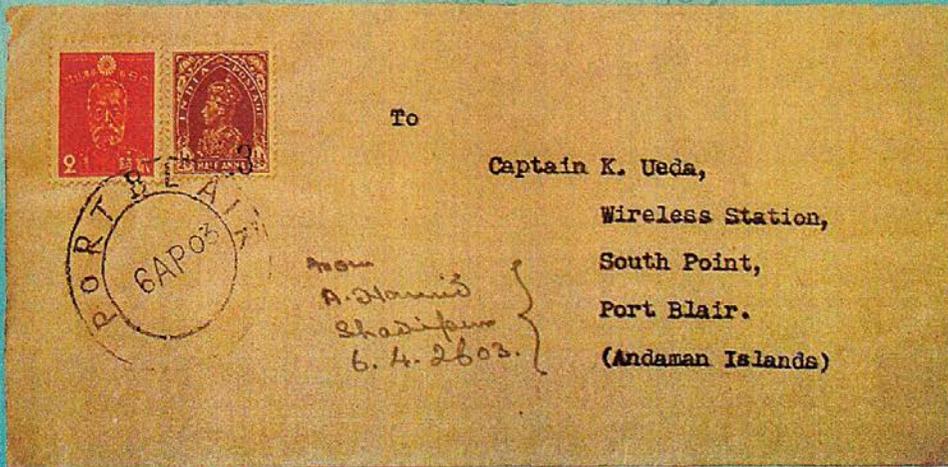
アンダマン・ニコバル諸島

新旧英領インド切手に、日本内地から持ち込んだ日付印用の数字活字を、黒と赤で手押しして新料額とした切手が発売されましたが、残っている数は非常に少ないです。

郵便物へ左
理由
昭南中央郵便局



20c/3psのみ赤加刷、他の4種は黒加刷。



2銭乃木とアンダマン加刷3cの1枚Aの混貼り。PORT BLAIR 6 AP 03 (RICARDOコレクション)
アンダマン加刷のカバーは、日本切手(2銭乃木または5銭東郷)との混貼りカバーと、加刷切手のみのカバーが各3通だけ確認されている。